

論文

ヴィルデンブルッフのホーエンツォレルン劇について

河合 まゆみ

要旨

エルンスト・フォン・ヴィルデンブルッフは、1880年代、1890年代を通じ、ドイツで最も人気のある劇作家の一人であった。1884年にグリルパルツァー賞とシラー賞を受賞し、作家としての地位を確立した彼は、ブランデンブルク・プロイセン史をドイツ史とのかかわりで描く歴史劇の連作を計画した。そして、自らが血をひくホーエンツォレルン家の人々を中心にすえ、15世紀初頭、ホーエンツォレルン家によるブランデンブルク支配の始まりを取り上げた一作目『クヴィツォー兄弟』、三十年戦争初期のベーメンの反乱を取り上げた二作目『将軍』、三十年戦争末期の若き日の大選帝侯を取り上げた三作目『新しい君主』を世に出した。しかし、このホーエンツォレルン劇執筆の企ては、皇帝ヴィルヘルム2世による第二作の上演禁止、さらにビスマルクの退陣にからむスキャンダルに見舞われ、第三作までで断念されることになった。『新しい君主』に向けられた厳しい批判、何より皇帝の不誠実な対応が、作者に断念を余儀なくさせたのだった。

キーワード：エルンスト・フォン・ヴィルデンブルッフ

0. はじめに

ヴィルデンブルッフは、ヴィルヘルム2世治下の帝政ドイツを代表する劇作家の一人である。ホーエンツォレルン家の血をひく彼は、一族の人間を中心にすえ、ブランデンブルク・プロイセン史をドイツ史とのかかわりで描く歴史劇の連作を計画した。そして、その第一作『クヴィツォー兄弟』は大成功をおさめた¹⁾。しかし、この企ては、皇帝ヴィルヘルム2世との確執がもとで、第三作までで断念されることになる。本稿では、まず二作目『将軍』が上演禁止になるまでの経過を追って、その理由を探る。次に三作目『新しい君主』がどのよ

うに前作と結びついているかを検討し、さらに作品がビスマルクの退陣にからんでスキャンダルに見舞われた経緯を検討する。ヴィルデンブルッフがなぜホーエンツォレルン劇の執筆を断念するに至ったかを考察したい。

1. 『将軍』

ヴィルデンブルッフの代表作である『クヴィツォー兄弟』は、1888年11月9日にベルリンの王立劇場で初演されて大人気を博し、1918年の最後の公演まで、公演回数は273回にのぼった。まさにヴィルヘルム2世治下の帝政ドイツを象徴する作品といえる。父フリードリヒ3世の喪が明けて初の観劇に『クヴィツォー兄弟』を選んだ皇帝は、幕が下りると、作者に手を差し伸べながら、「親愛なるヴィルデンブルッフ、われわれが必要としているのは、まさにこういう作品だ。私は、あなたが私の使命を軽くしてくれることに感謝する²⁾」と声をかけたそうである。

この8か月前の1888年3月、老皇帝ヴィルヘルム1世の死後間もない頃、ヴィルデンブルッフはリッツマンに宛てた手紙で、次のようにホーエンツォレルン劇執筆の意図を表明している。

もし神が私に力を与えてくださるならば、私はこの最初のホーエンツォレルン劇にさらに一連の作品をつけ加えようと考えています。それらの作品では、この強力な一門を中心にすえます。私はこのプランを思いついて以来、奇妙に落ち着いてしっかりしています³⁾。

すでにこの1か月前、ヴィルデンブルッフは二作目『将軍』の初稿を親しい仲間内で朗読している。1889年の冬、「他の作品にはなかった心の喜びを感じながら⁴⁾」作品を書き上げ、春には、ドイツ劇場に上演を依頼している。ヴィルデンブルッフはこの作品のなかで、三十年戦争初期のベーメンの反乱を取り上げている。三十年戦争の発端となったプラハ城での「窓からの墜落事件」の後、ベーメンの新教徒は、ドイツ皇帝でもあったフェルディナント2世を廃し、カルヴァン派のプファルツ選帝侯フリードリヒ5世を国王に選んだ。この時、ブランデンブルク選帝侯ゲオルク・ヴィルヘルムの叔父であるマルク伯ヨハン・ゲオルクは、新教徒側になって戦い、1620年11月8日、ヴァイセンベルクの戦いで皇帝軍に敗れた。この作品は、明らかにシラーの『ヴァレンシュタイン』を意識して書かれている。ヴィルデンブルッフがこの新作を、『クヴィツォー兄弟』を上演中の王立劇場ではなく、ドイツ劇場に持ち込んだことには理由があった。彼は次のような弁明の手紙を王立劇場の監督に宛てて書いている。

私が戯曲創作のために定めた道、祖国の歴史をその主要な瞬間で再現することをめざす道の途上では、王立劇場の舞台で再現するのが不可能、ではないにしても困難、な人物、素材、いざこざに行きあたってしまうことは避けられません。そのような素材が今回の作品に登場するのは。作品中、主人公であるホーエンツォレルン家の極めて近い親族が反逆者として舞台上で射殺されるのです。私の状況判断と決定を正当化するには、この暗示で十分と思います⁵⁾。

こうして1889年冬にはドイツ劇場でスター俳優をそろえて上演されるはずが整っていたが、最初のリハーサルを目前にした1889年10月11日、ハプスブルク家に批判的であるという理由で、上演を差し止める旨の知らせが舞い込んだ。作品に問題があるとは自覚しながらも、そこまでは予想していなかったヴィルデンプルッフは⁶⁾、その日のうちに皇帝に宛てて八頁にも及ぶ直訴状を書いている。作者にとってホーエンツォレルン劇がどういう意味を持つのかを表す箇所を、以下に引用する。

マルク伯が幾つかの場面でハプスブルク家に反対の意思を強く表明することは、認めます。もし陛下が、これら個々の表現を不快に思われるのであれば、いつでも喜んで、それらを上演で削除します。わたしが陛下に懇願しますのは、次のことです。こういった個々の表現のために全体を禁止にはなさないでください。……この作品は、私の将来の創作にとって極めて重要なものなのです。私はそれを全く新しいスタイルで、ドイツ語韻文で、書きました。私が自らに示した道をそのまま行くことができるかどうか、行くべきかどうか、つまり一連の戯曲を創作するべきかどうかの判断は、この作品がどうなるのかにかかっています。私はそれら一連の戯曲で、プロイセン国家の勃興と成長を、ホーエンツォレルン家において、ホーエンツォレルン家とのつながりのなかで、描くつもりです⁷⁾。

検閲局に問い合わせたところ、上演差し止めの措置は皇帝の直接のイニシアチブによるが、案件はまだ帝国宰相の手元にあり、その判断待ちであることがわかる。ヴィルデンプルッフは自身の上司である外務長官ヘルベルト・フォン・ビスマルク⁸⁾に相談し、1889年10月13日、宰相ビスマルクとの会談が実現した。ビスマルクは問題となっている戯曲をまだ読んではいなかったが、ヴィルデンプルッフの立場に理解を示し、支援を約束してくれた。後日、10月19日、刊行された作品をビスマルクに献本する際、ヴィルデンプルッフは自分の作品が厳しい批判にさらされていることを次のように訴えている。

ミュンヘン、シュトゥットガルト、ドレスデン、ダルムシュタットでは『クヴィツォー兄弟』は上演されていません、あまりにプロイセン的すぎるという理由で。ドイツの大部分の新聞で、私は、ドイツ文学にプロイセン主義を取り入れようとしていると書かれています。もしこの作品がベルリンで禁止されれば、プロイセンの劇場では半分死んだも同じ、ドイツ全体でみれば完全に死んだも同じです。あざけりと勝利の叫びが沸き起こることでしょう⁹⁾。

ビスマルクの介入で事が解決するかと思われたが、事態は二転三転する。11月には、非公式に外務省を辞任するべく促されるまでに至るが、11月27日、ヘルベルトが作者に知らせた皇帝の決定によると、作者は外務省を辞める必要はないが、プロイセンの王立劇場ならびにベルリンの私設劇場での上演が禁止され、「将来的に、戯曲のためにはプロイセン史のもっと喜ばしい時代を選ぶように」¹⁰⁾ とのことであった。禁止の理由は明らかにされなかった。このスキャンダルは当時、社会をにぎわし、いろいろな噂が飛び交った。禁止の原因は、ハプスブルク家に批判的なこと、あるいはブランデンブルク選帝侯ゲオルク・ヴィルヘルムを無能な支配者としていることなどが取りざたされた。しかし、どちらの理由も上演差し止めになるほどのものとも思えず、まして、問題と思われる箇所は作者自らが削除すると申し出ていることから、この決定はヴィルデンプルッフにはとうてい納得のいかないものであった。リッツマンによると、ずいぶん後になって作者は、禁止の原因が皇帝の母親ヴィクトリアであることを人伝に聞いたらしい¹¹⁾。彼女は、同じ英国王女であるエリザベートが作中でずいぶん悪く描かれていることを一種の屈辱と受け取り、深く感情を害し、皇帝に不満を述べたという。しかしこれは信憑性に欠ける、とヴァールは言っている¹²⁾。当時の宮廷におけるフリードリヒ3世未亡人の影響力と、ヴィルヘルム2世母子間の関係とを考えると、むしろ皇帝が作中プファルツ選帝侯夫妻に両親の面影を見出し、不快に感じたのではないかと推論している。いずれにしても、この上演禁止はヴィルデンプルッフにとって、はかり知れない大きな打撃であった。

以下、上演禁止の理由をさぐりながら、作品の内容を詳しくみていく。第一幕は、ベルリンの選帝侯の城を舞台に、ゲオルク・ヴィルヘルムの長男であるフリードリヒ・ヴィルヘルム（後の大選帝侯）の洗礼が滞りなく終わったところから始まる。ゲオルク・ヴィルヘルムの義兄にあたるプファルツ選帝侯フリードリヒとその妻エリザベート、ゲオルク・ヴィルヘルムの叔父であるマルク伯ヨハン・ゲオルク、さらにゲオルク・ヴィルヘルムの母である老アンナらが登場する。ここですでに新教徒側の深刻な内部対立が明らかになる。つまり、プファルツ選帝侯、ゲオルク・ヴィルヘルム及びヨハン・ゲオルクはカルヴァン派、しかし老アンナやベルリン市民はルター派なのである。したがって老アンナは洗礼には立ち会わな

かったが、愛する孫のフリードリヒを抱きしめながら、この子は「未来であり希望であり力である」(350)として、ホーエンツォレルン家の「夜明け」(350)を予言する。ヨハン・ゲオルクはアンナに対し、共通の敵であるカトリックの皇帝フェルディナント2世の前ではルター派とカルヴァン派は手を組むべきだと主張する。しかし、前選帝侯ヨハン・ジギスムントがカルヴァン派に改宗したのはヨハン・ゲオルクのせいだ¹³⁾と信じる老アンナは、カルヴァン派ではなく皇帝に与すると言い切り、二人は決裂する。

第二幕ではシュレージエンのドーナ男爵が登場する。彼はプラハ城で皇帝の代官二人が窓から投げ落とされる現場に遭遇した。この二人ともが死なずにすんで逃げたことを、神がフェルディナントに味方した証拠とみなし、心が乱れている。そのドーナが唯一、真の戦士、英雄として信じるのがシュレージエン軍を率いる將軍ヨハン・ゲオルクであった。ヨハン・ゲオルクはホーエンツォレルン家がドイツのために立ち上がるべき時がきたと言い、甥のゲオルク・ヴィルヘルムにベーメン王になるよう勧める。

私はお前をホーエンツォレルンと呼ぼう／聞け、同じホーエンツォレルンの者が願っていることを／目覚めよ、手遅れにならぬうちに／ブランデンブルク、ドイツの辺境よ／荒れ狂う海の只中で／灯台となれ、そびえよ、力強く！／……／ドイツはもはやウィーンにあらず／ドイツは私だ／ドイツはベルリンにあるのだ！（405）

選帝侯ゲオルク・ヴィルヘルムは叔父であるヨハン・ゲオルクを敬愛しながらも、決断力がなく、側近に意見を求めるばかりである。総督シュヴァルツェンベルクは、カトリックで皇帝派であり、ヨハン・ゲオルクの考えは「反乱、裏切り」(406)であると決めつける。宰相ブルックマンもブランデンブルクには「武器もなければ軍隊もない」(408)と中立を主張したため、ヨハン・ゲオルクの見論は失敗し、最後の望みをベルリン市民にかけるが、当のベルリン市民は彼を憎んでいたのだ。市内にはヨハン・ゲオルクを攻撃するピラが出回り、ついには反乱が起き、彼は即刻ベルリンから出て行くことを求められた。完全に孤立し絶望したヨハン・ゲオルクにエリザベートがともに戦うことを申し出る。

第三幕、舞台はプレスラウ城にうつる。シュレージエン軍を率いる將軍ヨハン・ゲオルクは、戦う気概もなければ状況判断もできないベーメンの貴族に辟易する。さらに、カトリックに改宗したドーナ男爵から、「あなたはここの人々には善良すぎる／かれらはあなたの魂を食いつくしてしまうだろう／高貴な獲物に群がる犬のように／あなたを彼らにしぼりつけている絆を断ち切るのです」(466)と忠告され、迷いが生じる。一方、第二幕でエリザベートの手相を見て王座を予言した占い師ゲノフェーファが、今度は無理やり請われ、夢で未来を判断する。彼女が夢見の状態で、ハプスブルク家の敗北と、「神が我々に遣わされた救世主」

(478) の存在を告げる。夢のなか、人々がその人物の名を叫んでいるが、なかなか聞き取れず、やっと「フリードリヒ」(478) とだけ告げた後、彼女は気を失ってしまう。この様子を目の当たりにしたヨハン・ゲオルクは、迷いを捨て、プファルツ選帝侯フリードリヒをパーメン国王として承認するのだった。もちろん観客は、当然ながら、この「フリードリヒ」が大選帝侯フリードリヒの方を指すことを知っている。

第四幕の舞台はプラハ城。ティリー將軍率いる皇帝軍がプラハに迫っている。フリードリヒは部下を見捨て、プラハに逃げ帰ってくる。戦況よりも、まず入浴と食事が大切と、身づくろいをし、ボヘミア貴族たちと豪華な食卓につく。その間、プラハ北方のヴァイセンベルクではボヘミア軍が皇帝軍を迎え撃つが、瞬く間に蹴散らされ、すでに城にも大砲の音が聞こえるようになる。プラハ市民たちが城へなだれ込んでくるようになると、フリードリヒはボヘミア貴族たちとともにわが身大事と逃げ出していく。ヨハン・ゲオルクはエリザベートとともに死ぬよう迫るが、怖気づく彼女を見て、フリードリヒ夫妻を信じた自分の判断が「完全なあやまち」¹⁴⁾であったと悟り、一人敵軍に身を投じるのだった。

歴史的に見て、三十年戦争、とくに選帝侯ゲオルク・ヴィルヘルムが統治した1640年までの期間は、プロイセンにとって最悪の時代であった。ハフナーの言葉を借りれば、「三十年戦争においてブランデンブルクは、何年もの間、スウェーデン軍と皇帝軍の両方から、もはや再起できないと思われるほど徹底的に破壊され続けた。」¹⁵⁾ また、「きわめて虚弱で気の弱い君主」¹⁶⁾であったゲオルク・ヴィルヘルムは、対外的にはスウェーデンと皇帝の間を、内政的にはルター派の母親とカトリックのシュヴァルツェンベルクとの間を揺れ動くばかりであった。1620年、プロテスタント貴族の選んだ国王フリードリヒとカトリックのフェルディナント2世との戦いで勝敗を決定づけたのは、ルター派のザクセン選帝侯とカトリックのバイエルン大公であり、ブランデンブルク選帝侯は何の役割も果たしていない。ホーエンツォレルン家にとって最悪だったこの時代を戯曲化するために作者が見出した主人公がマルク伯ヨハン・ゲオルクである。歴史上ほとんど無名に近いこの人物、選帝侯ゲオルク・ヴィルヘルムの叔父にして前選帝侯ヨハン・ジギスムントの弟を、作者は、カトリックの皇帝に対抗するためカルヴァン派とルター派との和解を説く熱狂的な愛国者、生まれながらの戦士として作品の前面に押し出した。現実のヨハン・ゲオルクは、選帝侯ヨハン・フリードリヒの次男であり、1606年に父親からイエーガードルフを譲り受けるが、このシュレージエンの地の支配をめぐる、ハプスブルク家との諍いが絶えなかった¹⁷⁾。パーメンの反乱に対して他のシュレージエン諸侯が態度を決めかねていたなかで、ヨハン・ゲオルクだけは即座に反乱軍に合流した。彼は「最も活発なプロテスタントの闘士」¹⁸⁾であったがゆえに、反乱鎮圧後、皇帝から追放処分されるが、1624年に亡くなるまで皇帝と戦い続けた。1620年のヨハン・ゲオル

クの戦いは、シュレージエンの支配をめぐるハプスブルク家との争いであり、作中で描かれているようなドイツ的な視野に立つてのプロテスタント間の和解を目指すものではない。このヨハン・ゲオルクという主人公に関しては、歴史的に見てあり得ないという批判の声が作者の周辺からもあがり、それに対してヴィルデンブルッフ自身が次のように弁明している。

ヨハン・ゲオルクは歴史のなかでは無名に等しい。私が彼を見出したのです。彼は私のものであり、私は作者の権限で彼を意のままにすることができるのです。あの不穏な時代、ある重要人物がハプスブルク家を実際にドイツの墮落と感じたとして、それはそんなにありえないことなのでしょうか？¹⁹⁾

プファルツ選帝侯夫人であるエリザベートは、作中、英国王女として文化的に劣ったドイツを軽蔑する野心に満ちた女性として描かれている²⁰⁾。歴史上、英国の第二王位継承権を持つ彼女の存在は大きな意味を持ち、その美貌と闊達さで人々を魅了したようだ。作中、彼女は占い師の言葉を信じ、夫フリードリヒやヨハン・ゲオルクの運命を誤った方向へと導いていくのである。その結果、ヨハン・ゲオルクとエリザベートは恋愛関係に近い間柄となる²¹⁾。とくにエリザベートは、夫フリードリヒとは対照的な、男らしい戦士であるヨハン・ゲオルクに魅かれる。この関係は『クヴィツォー兄弟』のディートリッヒとバルバラのそれに似ている。これは、もちろん作者の創作で、このあたりがヴィルヘルム2世の母親ヴィクトリアの不興をかかったとも思われる。

2. 『新しい君主』

ヴィルデンブルッフは『将軍』の完成後、すぐに三作目のホーエンツォレルン劇の執筆に取り掛かっており、上演禁止の騒動が起こった時にはすでに作品の半分が仕上がっていた。その後、「仕上がったとしても、どうなるかわからないまま、終わりまで書き上げます」²²⁾と作者自ら述べており、1890年2月に友人に作品完成を知らせている。作者は、なぜ三作目を放棄しなかったのだろうか。それは、三作目は前作の続編となるべき作品だったからである。むしろ、完結編といったほうがよいかもしれない。この作品で作者は、前作の冒頭で洗礼を受けたばかりであったフリードリヒ・ヴィルヘルムが、父ゲオルク・ヴィルヘルムの死により王座につく1640年を取り上げている。つまり作者は、三十年戦争という時代を二つの作品で描き出すつもりだったわけである。

『将軍』の上演禁止の措置に関して、皇帝から直接には、何の指示も反応も示されないままだったが、1890年10月、ヴィルデンブルッフは突然ポツダムに招かれ、そこで皇帝に新作

を披露することになる。若き大選帝侯を主人公にしたこの戯曲を皇帝は非常に気に入り、その場で修正や削除の細かい指示を出したといわれる²³⁾。ヴィルデンプルッフはその指示に従い、すぐに作品を手直ししている。数日後には、皇帝はこれまでにないほどの数の王族や諸侯を招いて『クヴィツォー兄弟』を上演させた。皇帝から作者への和解の印だったともいえよう²⁴⁾。『新しい君主』は王立劇場での上演が決まり、皇帝は舞台稽古にも立ち会った。皇帝の特別な愛顧もあってか、上演は大成功をおさめ、『新しい君主』は『クヴィツォー兄弟』に次ぐ人気を誇った。

以下、作品の内容を簡単にみていく。第一幕²⁵⁾、舞台はオランダのレーナ城、若き皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムとその従妹王女ホランディーネが登場する。二作目冒頭でマルク伯ヨハン・ゲオルクがその洗礼の代父を務め、祖母アンナから救世主と予言されたフリードリヒ・ヴィルヘルムは、今や二十歳の血気盛んな若者で、伯母であるプファルツ選帝侯フリードリヒ未亡人エリザベートの居城に滞在している。彼はちょうど城を訪問中だったロツヒョーが帰りしなにマルク代理統治者を評して「鋼のような意志に加えてダイヤモンドのような理性」(186)を持っていると言っているのを聞き、シュヴァルツェンベルクの名を心に留める。

第二幕、ブランデンブルクでは、総督のシュヴァルツェンベルクが権勢をふるっていた。ベルリンの街は飢えとペストで死にかけていたが、そういう市民の困窮に彼は目もくれようとしなかった。彼は選帝侯から全権を託されており、選帝侯の署名捺印のある白紙に自由に書き込むことができたのだ。その力を利用し、シュヴァルツェンベルクは皇帝軍と手を組み、スウェーデン軍を撃退するつもりだった。しかしルター派のベルリン市民は、同じルター派のスウェーデン王グスタフ・アドルフに親しみを感じていた。そんなベルリン市民を、シュヴァルツェンベルクは反逆者と決めつけるが、ベルリン市民にしてみれば、カトリックで皇帝フェルディナント3世と手を組むシュヴァルツェンベルクこそが反逆者であった。彼は皇帝軍のガラス将軍に、ブランデンブルクへの憎しみにも似た感情と、ハプスブルク家への愛着を次のように語る。

こんな国では暮らせない／あるのは労働と義務だけ／20年来、私はその面倒を見てきた／
そんなに長くたってしまった、過酷な義務が／私の人生からすべての喜びを奪ってしまっ
てから／……／そして何を報いとして得たのだ／この国民から何を？ 憎しみだけだ！／
……／ブランデンブルクの支配者はハプスブルク家でなければならない／私はこの国を
知っている、私が築いたのだから／この国はもう死んでいてからっぽだ／もはや生きる力
はない／……／ゲオルク・ヴィルヘルムが亡くなれば／ホーエンツォレルン家は終わりだ
／……／私はこの家への忠誠を守ってきた／苦境にあっても仕えてきた／それも終わ
りだ、私がしなければならないことはあと一つだけ／その最期を看取ることだ (220ff.)

ガラス將軍は皇太子の存在を気にかけるが、シュヴァルツェンベルクは以下のように皇太子を過小評価する。

何の意味もない若造だ／……／將軍という称号が／やつには最高の榮譽だ／やつがブランデンブルクに何を求めるといふのだ／大軍を擁するにはあまりに小さすぎる／皇帝はやつをかなえ／いくつかの連隊を与えておけばよい／歩兵隊でも騎兵隊でも／そうすれば皇帝の傭兵隊長として／やつは戦って勝利するさ（222f.）

シュヴァルツェンベルクは、皇帝に忠誠を誓い、皇帝が資金を出して募集する八つの連隊を指揮するよう、將校たちに要求する。ロツヒョーたちは即座にこの申し出を受けるが、ブルクスドルフだけは事態を見極め、不用意に皇帝に忠誠を誓えば、いずれブランデンブルクと戦うことになるかもしれぬと躊躇するのだった。

第三幕、シュヴァルツェンベルクは、ベルリンの防御をより強固にし、スウェーデン軍の侵入を許さぬよう、ベルリン・ケルンの郊外の家々に立ち退きを命じる²⁶⁾。ベルリン市の参事会員や監査役たちがその命を知らせにまわる。居酒屋の主人ヤーコブは選帝侯に手紙を書いて直訴すると息まぐが、今はシュヴァルツェンベルクが我々の主人だと諭される。そこへ、以前この店で働いていたシュトルヒが、今は皇帝軍の兵士となって、仲間たちをつれてやってくる。さらに女たちも連れ込み、ばか騒ぎをした挙句、恩知らずにも、ヤーコブの娘を愚弄したため、ヤーコブはシュトルヒを刺殺してしまう。

第四幕、危篤の父選帝侯のもとへ向かう途中の皇太子がベルリンに立ち寄る。シュヴァルツェンベルクは皇帝の軍隊を配置して皇太子を出迎える。その周到な出迎えに感激した皇太子はシュヴァルツェンベルクをねぎらうが、後になって、スウェーデンとの同盟の破棄に始まり、ケルン郊外の家々の退去の件、さらに兵士を殺害した居酒屋主人が地下に捕らわれていること、この一件の原因となった主人の娘がロツヒョーの愛人であることなどが続けさまに判明する。そこへ父選帝侯が亡くなったとの知らせが届き、城の前には多くの人々が集まり、フリードリヒ・ヴィルヘルムの名を呼ぶ。彼は、「これが私の国民だ」（306）と感動するのだった。

第五幕、翌日、新選帝侯はシュヴァルツェンベルクに相談なく、スウェーデンとの和平のための使者を送る。彼は、シュヴァルツェンベルクが白紙の委任状を用いて、皇帝の資金で連隊を徴兵し、將校たちに皇帝への忠誠を誓わせていたことも知り、愕然とする。そして、ホーエンツォレルン家を裏切ったシュヴァルツェンベルクを責める。

私にはもう兵士はいない／家臣もいなければ、力もない／足元で、背後で／すべてが私から奪われてしまった／お前がやったのだ！／今、私はここにいる／生まれる前から／

打ちひしがれた敗者だ／私はこの国の選帝侯でありたい／成し遂げたい、感銘を与えたい／あらゆる地域に活気を呼び覚ましたい／飢える者を養いたい／彼らの希望を再び満たしたい／新しい人生、新しい繁栄／私にそれができるだろうか？できるのだろうか？いや、できない！（328f.）

このようなフリードリヒ・ヴィルヘルムの姿を目の当たりにして、シュヴァルツェンベルクは、選帝侯にふさわしい人物をようやく見出すことができたと感じ、もう一度自分を働かせてほしいと申し出るのだった。新選帝侯は連隊を皇帝に返上することにし、将校たちには、皇帝への忠誠を守って連隊とともにブランデンブルクを去ることを認めるが、できれば祖国のためにとどまってほしいと要請する。将校たちは次々ととどまるべく申し出るが、ロッヒョー以下数名は、スウェーデンとの和議を妨害し、無理やりフリードリヒ・ヴィルヘルムを皇帝側に立たせようと画策する。彼らは、今では新選帝侯に忠実であろうとするシュヴァルツェンベルクを拉致しようとし、そのショックで彼は死んでしまう。

第六幕、ロッヒョーの企ては頓挫する。彼の妹クラウディーネから、その裏切りを知らされたフリードリヒ・ヴィルヘルムは、ロッヒョーのもとへ自ら赴く。

最終幕では、フリードリヒは友人としてロッヒョーに投降するよう説得を試みるが、ロッヒョーは次のように答える。

スウェーデン軍を呼び込もうとしたのは正しかった／私は英雄を呼び覚ましたかったのだ／あなたのなかに眠っている、そう私は考えていた／しかし、あなたは英雄ではなかった／わたしがかつてあなたのなかに見たような／あなたが気に入るものは、私には気に入らない／あなたの気に入る平和な世界で生きればいい／私にごめんだ（376）

ロッヒョーは銃殺され、フリードリヒは地下に捕らわれていたヤーコプの釈放を命じる。集まっていたベルリン市民たちは、フリードリヒ・ヴィルヘルムをたたえ、忠誠を誓うのだった。

このように二作目と三作目のつながりは明らかである。ヴィルデンブルッフ自身、両作品を父と子の関係にたとえ、次のように書いている。

二作目の結末が残した悲劇的な苦悩から、三作目で観客はようやく解放されるのです。マルク伯ヨハン・ゲオルクは祖国をめぐる偉大な考えで身を滅ぼしました。しかし『新しい君主』では、彼の甥の息子、また彼の名付け子でもある、同じホーエンツォレルン家の大選帝侯が、その考えを再び取り上げ、勝利へと導くのです。もし『新しい君主』

だけでなく『將軍』もベルリンで上演されていたなら、観客は、両作品を貫く考えを理解し、『新しい君主』から射す光が冷たい輝きではなく、内なる炎であると感じることができたでしょう。そうすれば人々は、両作品を通して登場するシュヴァルツェンベルク伯の運命の変化がどうして起こったか認識できたことでしょう²⁷⁾。

プロテスタント・ドイツを守るため、ルター派とカルヴァン派をまとめて、カトリックの皇帝に対抗しようというヨハン・ゲオルクの企ては、シュヴァルツェンベルクの妨害のまゝで頓挫した。その20年後、選帝侯の全権を得て権力の絶頂にあるシュヴァルツェンベルクに対峙するのは、若き皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムである。皇太子を過小評価していたシュヴァルツェンベルクは、彼の情熱、行動力、そして祖国愛に圧倒され、臣下に下るのであった。もちろんこれは史実に反する。シュヴァルツェンベルクは最期まで皇帝派でありつづけた。作者は、その史実を変えることで、フリードリヒ・ヴィルヘルムに叔父ヨハン・ゲオルクの無念をはらさせたのだった。

二作目と三作目の筋書上の連続性は明らかであるが、人物設定をみると、むしろ一作目と三作目に共通点が多い。第一に、ディートリッヒ・クヴィツォーとロッヒョーである。作者は、三作目のタイトルを最初、『モーリッツ・アウグスト・フォン・ロッヒョー』としていたことからわかるように、ロッヒョーは作品の中心的人物である。最も登場回数が多く、すべての登場人物、すべての出来事をつなぎ合わせるキーパーソンとなっている。ディートリッヒもロッヒョーとともにマルク地方土着の有力貴族であり、新しい支配者に屈しようとしな根っからの戦士である。このロッヒョーを、リッツマンは、よく考えて作り上げられた最重要の登場人物の一人と評している²⁸⁾。史実では、シュヴァルツェンベルクの死後、その息子アドルフの周りに、新選帝侯への忠誠を拒否する反抗的な将校たちが集まった。その筆頭がシュパンダウ司令官ロッヒョーであった。1641年8月、身の危険を感じたアドルフは、すでに一度逮捕され保釈中のロッヒョーとともに皇帝軍に投降した²⁹⁾。したがって、結末でロッヒョーがフリードリヒ・ヴィルヘルムの友人としての言葉に耳を貸さず射殺されるのは、作者による創作である。次に、ニュルンベルク城伯フリードリヒと大選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルムであるが、前者は、ホーエンツォレルン家によるブランデンブルク支配の幕開けであり、後者はプロイセンが軍事的・君主的統一国家として大国にのし上がっていく基礎を築いた人物である。その敬虔さ、勇敢さ、統治能力など共通点が多いが、反面、作中では、フリードリヒは言葉の人、フリードリヒ・ヴィルヘルムは行動の人として描かれているという違いもある。さらに、両作品ともにベルリン市民が描かれていることも共通する。しかし、『クヴィツォー兄弟』に登場する市長ベルヴェニッツや鍛冶職人フィンケなどの活気に満ちた描写に比べると、『新しい君主』に出てくる市参事員シェンブルンや居酒屋の主人ヤーコプなどは、三十年戦争という時代

を反映してか、影が薄い。最後にシュヴァルツェンベルクが存在であるが、彼は、両作品を通して実際に登場する唯一の登場人物である。『将軍』では第二幕でしか登場しないが、マルク伯ヨハン・ゲオルクの企てを打ち砕く役割を演じる。『新しい君主』では、皇帝と手を組み、ブランデンブルクをハプスブルクの支配下におこうとする悪役として登場するが、最後はフリードリヒ・ヴィルヘルムに魅了され、その臣下となる。このあたりは、史実と異なる作者の創作である。実際には、フリードリヒ・ヴィルヘルムは1638年以降、父選帝侯とともにプロイセン公国におり、その死の知らせをベルリンで受け取ることはあり得なかった。即位後しばらくはプロイセン公国に遠ざけられていたため、彼がベルリンに戻るのは、シュヴァルツェンベルクの死後、1643年になってからであった³⁰⁾。またフリードリヒ・ヴィルヘルムのシュヴァルツェンベルクに対する態度に関しても作品は史実と違う。フリードリヒ・ヴィルヘルムは青年期からすでにシュヴァルツェンベルクに大きな不信感を抱いていた³¹⁾。ただシュヴァルツェンベルクの力はあまりに強大であり、即位後もしばらくはその力を排除することができなかった。こうしてみると、まず作品の舞台をオランダとベルリンに限定することで、皇太子のオランダでの明るく優雅な青年時代と、戦争で荒廃しきったベルリンで始まりを告げる苦難に満ちた統治時代を対照させることに成功している。またシュヴァルツェンベルクに対する皇太子の態度も、即位を機に大きく変わること強いインパクトを与える。

『新しい君主』は前作同様、再びスキャンダルに見舞われる。作者は1890年2月21日の手紙で、「新しい作品が完成しました。タイトルは「モーリッツ・アウグスト・フォン・ロッヒョー」といい、1640年頃の話です。話の中心はフリードリヒ・ヴィルヘルムで、まず皇太子、それからブランデンブルク選帝侯となります」³²⁾と書いている。おそらくこの直後、タイトルが『新しい君主』に変わっている。その時点で、新しいタイトルは危険だから気をつけるようにと警告した友人もいた。ビスマルク退陣の後には、作者がすでに2月初めには作品を完成させ、友人たちにお披露目していたことを正式な証言として残しておくよう忠告する友人までいた。「さもないと、作品が世に出たら、それはビスマルクの失墜を指しているのだと思われかねない」³³⁾というわけだ。ヴィルデンプルッフはそれらの警告を真に受けなかった。1891年2月8日に『新しい君主』は王立劇場で初演され、大成功をおさめるが、友人たちの危惧したとおり、人々は、1890年3月のヴィルヘルム2世によるビスマルクの退陣劇をこの作品に重ねて、大選帝侯=ヴィルヘルム2世、シュヴァルツェンベルク=ビスマルクと解釈する³⁴⁾。つまり、ヴィルデンプルッフはビスマルクの退陣を知ってから、あるいは前もって察知して、ヴィルヘルム2世の新しい時代を称えたというのだ。皇帝が見せた強い関心が何よりの証拠となった。ヴィルデンプルッフの言葉をかりれば、この「下劣な解釈」³⁵⁾は、当然ながら、まったくの的外れである。彼は、ドイツを統一に導いたビスマルクを非常に崇拜していた。その証拠に、『将軍』が上演差し止めになった時の、ビスマルクとの初めての謁見の様子を次のように記している。

私はビスマルクと知り合いになった。好意的であろうとしている時の彼に逆らうのは不可能であった。そしてその日、彼は好意的であろうとしていた。……「英国史がシェイクスピアによって戯曲化されているほどには、ドイツ史は戯曲化されていないことを私はつねに嘆いてきた。なぜなら、ドイツ史も少なくとも英国史と同じくらいは高貴なのだから。」彼がこれらの言葉を低いよく響く声で独り言のように話す間、私は彼を横からじっと見ていた。私には彼がライオンのように見えた。その庇護を任されている家の門の前に横たわり、警戒を怠らず、そして嫉妬しているライオンのように。……それから彼は將軍のテーマについて尋ねた。そしてそれを知ったとき、私が素材を祖国の歴史の最悪の時代から選んだことを残念だと言った。彼がそう言ったとき、私は彼の眼を見た。力強く、熱い目を。そしてこの男がいかにかドイツを愛しているかを感じた。もちろんそれは、熱狂的な愛情であり、祖国の偉大さ、素晴らしさだけが表されることを望んでいた³⁶⁾。

また退陣直後のビスマルクの誕生日には、ヴィルデンプルッフは月桂樹の冠に彼の偉業を称える詩を添えて贈っている。

さらに追い打ちをかけるように、ロッヒョー家から作品にクリームがつけられた。まずロッヒョーの妹クラウディーネは実在しないこと、次に兄のロッヒョーは、実際には皇帝軍に投降したが、のちに大選帝侯から許されていること、である。『新しい君主』が比較的早く王立劇場の演目から消えたのは、ロッヒョー家の抗議が影響したのではとヴィルデンプルッフは考えていたようだ³⁷⁾。

なぜホーエンツォレルン劇は三作で終わったのだろうか。ヴァールは、『新しい君主』に向けられた厳しい批評ゆえに、ヴィルデンプルッフはホーエンツォレルン劇を断念せざるを得なかったとしている³⁸⁾。『將軍』の上演禁止の時には、皇帝の専横に苦しむ作者に非常に同情的だった批評家たちが、今回は打って変わって厳しい批判を向けてきた。『新しい君主』は、上演禁止を恐れた作者が、皇帝に追従した作品であると見なした批評家たちは、神経質なほどの拒否反応を示したのだった。とくに作者にとって痛手だったのは、それまでは作者の支援者であった自由劇場の支配人ブラームが、「王家の宣伝者」³⁹⁾として彼を非難したことであった。しかし、こうした厳しい批判だけが原因で、作者がホーエンツォレルン劇を断念するとも思えない。作者は、この作品の上演の成功を受けて、次のように書いている。

私の作品がベルリンの憎悪集団に対して挑んだ、あるいはこれから挑む戦いは、私に軍配が上がりそうです。私はそう思いますし、そう望みます。なぜなら、一握りの悪意ある、

狭量なやかましい連中が、愛国心もなく、ドイツ国家の神聖さを敬うこともなく、ドイツ国民への愛情もない輩たちが、我々を逆境や災難から救ってくれるような全てのがうたわれ、語られる作品を罵倒することは、ドイツの利益、名誉のためにもあってはならないと思うからです。……しかし私は国民にたいして恩知らずにはなりたくありません。かれらは、批評家よりも私を信じていてくれることを示してくれました⁴⁰⁾。

ヴィルデンプルッフは、そもそもホーエンツォレルン劇執筆を計画した時点で、これは「文学のための作品とはなりません。したがって、文学的批評がそれに何を言おうと気にするつもりはありません」⁴¹⁾ と言い切っている。

『新しい君主』はベルリンでの成功を受けて、地方でも人気を博した。一方の『將軍』は、ベルリンにおける完全な上演禁止が他の地方の劇場にまで影響を及ぼし、結局、この作品はタブー視され、ほとんど上演されることがなかった。しかし第二作の上演禁止の措置だけならば、ヴィルデンプルッフにホーエンツォレルン劇を断念させることはなかっただろう。ヴィルデンプルッフは、以下の義父への手紙に書いているように、皇帝が自ら作品を読むことなく、ただ報告を聞いただけで、作品を上演禁止にしたと考えていた。ヴィルデンプルッフにとって何より耐え難かったのは、彼が創作への思いを吐露した直訴状を皇帝が無視したことであった。これは、作者の出自から来ているのかもしれないが⁴²⁾、彼は芸術の領域で、皇帝を一種のパートナーだと考えていた。それだけに、皇帝の無理解がヴィルデンプルッフにとっては決定的であった。

私は彼の魂のなかに自分の魂を見いだしたと思ったのです。彼と手に手を取ってブランデンブルク・プロイセンの歴史のなかを進んでいこうと思ったのです。その偉大な行為のことを考えれば、それがもとでへつらい云々と批判されることはなんでもありません。そして、全力を挙げてこの考えを実行に移そうとしたその時、……この禁止、私の生涯をかけた作品を中断し、死刑判決を下すこの一撃がきたのです⁴³⁾。

3. おわりに

ヴィルデンプルッフは、今日ではドイツ文学史上、ほとんど忘れ去られた存在であるが、当時、最も大衆に人気を博した劇作家であった。彼は、とくに自然主義台頭後、いわゆる「宮廷作家」として厳しい批判にさらされることになる。そのような状況のなか、『將軍』の上演禁止をきっかけに、ヴィルデンプルッフの皇帝ヴィルヘルム2世への不信任は抑えきれないものになっていった。結果、作家人生をかけてのぞんだホーエンツォレルン劇は、三作で断念されることになったのだ。

注

テキストは Wildenbruch, Ernst von: Gesammelte Werke in 16 Bänden. Hrsg. von Berthold Litzmann. Berlin (Grotesche) 1911-1924. を使用。『將軍』の引用は第9巻から、『新しい君主』の引用は第10巻から、すべて本文中、引用後の括弧内に頁数のみ記す。

- 1) 詳しくは拙稿「エルンスト・フォン・ヴィルデンブルッフの『クヴィツォー兄弟』」(愛知大学言語教育研究室『言語と文化』第34号, 2016) 参照。
- 2) Litzmann, Berthold: Ernst von Wildenbruch. 2 Bände, Berlin 1913-1916, hier Bd.2, S.60. この言葉が表すように、ヴィルヘルム 2 世は『クヴィツォー兄弟』をプロパガンダのために利用した。Vgl. Kellner, Bernhard: „*Ich war kein Wildenbruchianer, zum Leidwesen vieler, besonders zweier, des einen mutmaßlich, des anderen gewiß. Der eine war Wildenbruch, der andere war ich.* (Theodor Fontane) Ernst von Wildenbruch, der 'Klassiker des verpreußten Deutschlands' (Franz Mehring), im Fokus der zeitgenössischen Literaturkritik.“ (Magisterarbeit) Würzburg 1996, S.28ff.
- 3) Litzmann: a.a.O., S.61.
- 4) ヴィルデンブルッフは『將軍』の執筆から上演禁止に至る経過を、作品が1901年に刊行される際、その序文に詳しく記している。Wildenbruch: Der Generalfeldoberst. Ein Trauerspiel im deutschen Vers. Berlin 1901, S.1.
- 5) Leutert, Torsten: Ernst von Wildenbruchs historische Dramen. Frankfurt a.M. 2004, S.114.
- 6) 1884年の政令で、すでに亡くなっていようと、王家の一員を舞台に登場させるには、必ず君主直々の許しを得なければならなかった。ヴィルデンブルッフはそれまでの経緯から、この政令を単に形式だけのものと軽く考えていたようだ。Vgl. Litzmann: a.a.O., S.69f.
- 7) Leutert: a.a.O., S.116.
- 8) ヴィルデンブルッフは外務省の法律部門に勤務しており、上司のヘルベルトは宰相ビスマルクの長男であった。
- 9) Litzmann: a.a.O., S.73.
- 10) Ebd., S.75.
- 11) Vgl. Ebd., S.76f.
- 12) Vgl. Wahl, Hans Rudolf: Die Religion des deutschen Nationalismus. Eine mentalitätsgeschichtliche Studie zur Literatur des Kaiserreichs: Felix Dahn, Ernst von Wildenbruch, Walter Flex. Heidelberg 2002, S.187.
- 13) 史実では、ヨハン・ジギスムントは1613年、クレーフェ相続のためカルヴァン派に改宗した。
- 14) Leutert: a.a.O., S.116.
- 15) Haffner, Sebastian: Preußen ohne Legende. 10. Aufl. München 1998, S.63.
- 16) Ebd.
- 17) Vgl. Viermann: Jägerndorf unter der Regierung von Hohenzollern. In: Zeitschrift des Vereins für Geschichte und Alterthums Schlesiens. Band 11, Breslau 1871, S.36-96, hier S.85ff.
- 18) Waş, Gabriela: Religionsfreiheiten der schlesischen Protestanten. Die Rechtsakte und ihre politische Bedeutung für Schlesien. In: Geschichte des christlichen Lebens im schlesischen Raum. Münster 2002, S.451-482, hier S.471.
- 19) Leutert: a.a.O., S.113.
- 20) C. ヴェロニカ・ウェッジウッド (瀬原義生訳): ドイツ三十年戦争 (刀水書房) 2003年, 112頁参照。
- 21) Röhr, J: Wildenbruch als Dramatiker. Kritische Untersuchungen. Berlin 1908, S.97.

- 22) Litzmann: a.a.O., S.114.
- 23) リッツマンによれば、皇帝は、若き選帝侯とクラウディーネが恋仲になることを認めず、変更を要求したようだ。そこから推測するに、『將軍』におけるヨハン・ゲオルクとエリザベートのからみも、おそらく皇帝には気に入らなかったのではなかろうか。Vgl. Litzmann: a.a.O., S.121.
- 24) Vgl. Wahl: a.a.O., S.185. Kellner: a.a.O., S.28.
- 25) 幕と訳したが、この作品は Akt ではなく七つの Vorgang から成り立っている。
- 26) シュヴァルツェンベルクは、実際に、ベルリン・ケルンの郊外の家々を焼き払った。それを後に大選帝侯は咎めている。
- 27) Wildenbruch: a.a.O., S.VII
- 28) Vgl. Litzmann: a.a.O., S.120.
- 29) Vgl. Hüttl, Ludwig: Der grosse Kurfürst. Friedrich Wilhelm v. Brandenburg. München 1981, S.89f.
- 30) 成瀬治・山田欣吾・木村靖二編：ドイツ史 全三巻（山川出版社）1996年、ドイツ史 2 - 1648年～1890年 - 49頁参照。
- 31) Vgl. Hüttl: a.a.O., S.70.
- 32) Litzmann: a.a.O., S.114.
- 33) Ebd., S.115.
- 34) Vgl. Hanstein, von Adalbert: Das jüngste Deutschland. Zwei Jahrzehnte miterlebter Literaturgeschichte. Leipzig 1905, S.276.
- 35) Litzmann: a.a.O., S.116.
- 36) Wildenbruch: a.a.O., S.III f.
- 37) Vgl. Litzmann: a.a.O., S.123.
- 38) Vgl. Wahl: a.a.O., S.190.
- 39) Kellner: a.a.O., S.72. ヴィルデンプルッフは『新しい君主』上演前の1990年9月、急いで書き上げた新作『とさか雲雀』をドイツ劇場で上演し、人々を驚かせた。これは、上演禁止となった『將軍』の穴埋めのための作品で、内容もスタイルもそれまでの作品とは全く異なる現代劇であった。プラームをはじめとする批評家たちは、そこに作者の転向、心変わりを見咎め、それだけ手厳しく『新しい君主』を批判することになった。
- 40) Leutert: a.a.O., S.129.
- 41) Litzmann: a.a.O., S.61.
- 42) ヴィルデンプルッフは、フリードリヒ大王の甥として有名なルイ・フェルディナント王子を祖父にもつ。
- 43) Litzmann: a.a.O., S.76.